

日本語教育の問題点

木 村 宗 男

語研の日本語教育の問題点といえ、そのうちには、日本語教育全般に共通の問題、さらには、一般の語学教育につながる問題も数多くあるが、ここでは早稲田大学内の日本語教育に固有の問題点のみについて報告しよう。

早稲田大学は外国人学生に対して、かなり広い間口をひろげている。政経・法・文・教育・商・理工の各学部と、大学院各研究科に籍をおく正規の学生と聴講生のほか、外国の大学との交換留学生がいる。語研・社研などのような付属研究所の聴講生もいる。そのほか、昨年9月に開設された国際部というものがあり、そこには外国の大学から集団で留学して来る外国人学生がいるが、この部では国際部にはふれない。

外国人学生の数は1963年6月外事課調べで、350名(うち女子34名)。国籍別にみると、中華民国の199名(うち女子29名)を筆頭に、(以下順序不同)韓国・香港・マライ・インドネシア・タイ・インド・パキスタン・セイロン・サラワク・フィリピン・カンボジアなどのアジア諸国、アメリカ・カナダ・ペルー・ボリビアなどの南北米州諸国、フランス・ドイツ・スイス・デンマーク・ハンガリー・イギリスなどの欧州諸国、それにオーストラリアとアラブ連合。このうち、マライ・サラワク・フィリピン人学生は今のところ、中国語を母語とする者ばかりである。

以上のような各国人学生が、おのおのその志望する学部・学科・専攻にわかれている。専攻科別をタテ糸、出身国別をヨコ糸にみたとすると、その織りなす文様はまことに複雑なものと思わなければならない。まずこのことを強調しておきたい。

350名の外国人学生の日本語の学力が、またまちまちである。入学と同時に、曲がりなりにも日本語による講義が理解できるというものから、全くの初

歩まで、千差万別といっている。毎年新入学生は入学試験の日本語の成績で、4段階に大別される。この試験はふつうの筆記試験のほか、作文、聞きとり、面接からなっている。曲がりなりにも日本語による講義がせめると判定されたものをAとし、以下B・C・Dに分ける。1963年4月の入学者はつぎのように分けられた。

A 61名 B 45名 C 該当者なし D 26名

B・C・Dと判定されたものは日本語が必修、Aは随意である。理工学部では1962年から、商学部では1963年から、日本語の履修に対して1年4単位を与え、これを第2外国語の単位として扱うこととなった。以来、Aのもので日本語を履修するものが多くなった。第2外国語となると2年連続履修しなければならない。1962～3年には日本語教室の学生が飛躍的に増加した。1963年度の数字はつぎのようになっている。

A 29名 B 65名 C 該当者なし D 33名

毎週の授業時数はA 4時間、B 6時間、C 12時間、D 18時間ときまっている。

入学者の学力格差が大きいのはなにによるのか。入学前の学習経歴がまちまちだからである。入学者の中には、戦前・戦中の台湾・朝鮮で、日本の教育制度のもとに小学校教育を受けたものがある。Aはこういった学生が多い。この年代のものは年々少なくなっていくが、その反面、1962年ごろから、母国の大学その他の機関で日本語を修得したというものが増加して来た。ヨーロッパからの交換留学生は例外なく1年以上大学で日本語を修得して来る。しかし、おなじ1年学習したといっても、国により、地域により、学力にかなりの差が認められる。いったいに、母国で日本語をやった来たというものは、読む力はあっても聞く力と表現力が落ちるという傾向がある。その点、今までの日本の学生の英語力に似ている。

東南アジアの留学生は、それぞれの国に十分な日本語教育施設がないため、

まず日本へ来て、平均1年を日本語の学習に当てる。国際学会・アジア大学その他の日本語教育機関を経て来るものが多い。きわめて初歩の段階から出発して、読む・書く・話す・聞くの能力を平均して修得している。それぞれの機関は日本語教育に豊富な経験を持ち、大きな成果をあげているが、なんといっても、1年という期間は東南アジアの学生にとっては短かすぎる。

そのほか、学校の日本語教育を受けないで来るものもある。家族から習ったもの、家庭教師についたもの、独習したものなど。北米・南米の三世たちもこの中に入れていいだろう。この学生たちは、いったいに話す・聞く・読む・書くの能力の間に均衡がとれていない。

こういった学習経歴を異にし、言語能力に均衡を欠く学生たちを、入試の成績だけで分けるのは大まかな分け方である。合計の点数は同じでもその内訳がいちじるしく異なるものが少なくない。A・B・C・Dに分けたものをさらに小分けする必要がある。また、かりにインドネシア人と中国人が、現在同じ学力であったとしても、今後の進歩の歩度が同じであるとはいえない。中国系の学生は口頭練習による基本文型が修得できると、あとは漢字の知識にものをいわせて、他の学生をぐんぐん引き離すことができる。これを同一のクラスにとじこめておくことはできない。

そこで母語に漢字を使うものと、そうでないものとを分ける必要がおこってくる。たとえば、中国系学生は初期に口頭練習に重点をおき、あとは漢字の知識を利用して伸びるようにすべきだが、はじめから漢字に頼って口頭練習による文型の修得を怠ると、学力は伸びない。反対に漢字を使わない国民は、ある時期までに、最少限必要な漢字を修得しなければならないのに、それを怠ってただ耳と口だけに頼ろうとする。この両者に同じような指導はできないわけである。

つぎに早大の日本語教育の問題点の要因となるものは、早大の外国人学生はすでに各学部へ属し、専攻もきまっているということである。中には、3年編

入で、入学と同時に専門教育を受けるものもある。学生は必修として課された日本語の時間のほか、できるだけ多くの授業に出席して、早く単位を取ろうとする。Dの学生も例外ではない。日本語のむずかしさが分っていない。10か月後にはなんとか講義も分るようになり、試験にも及第すると思つてのことだろう。数式や化学記号をふんだんに扱う学科ならまだいい。日本人学生と机をならべて講義を聞き、理解し、ノートをとり、教科書や参考書を読み、レポートを書くということは、どんなに日本語のできる外国人でも、むずかしいという。3年編入の学生はよほどの学力がないと、ついていけない。にもかかわらずかれらはこの難事業をあえて行なおうとするのである。そのため、日本語の授業を欠席しても、学部の授業の勉強をするという学生も出てくる。無理もないともいえる。かれらの目的は専攻の学科を卒業することであつて、日本語の修得は目的ではなく、手段にすぎない。念願かなつて日本に留学し、志望の大学に入ったばかりの学生である。知識慾と学習意慾に燃えている。すでに1年あるいはそれ以上の日本語教育を受けて来たかれらに、ここでもう1年日本語の授業のみに専念するようにいっても、きくわけがない。そこで、このさかんな知識慾をmotivationとして活用することを考えなければならない。Dの入門期をのぞいては、できるだけ専攻学科目に近い教材を選ぶようにわれわれは努力している。こうした若い学生の場合、知識を得るための手段としてことばを学習するはずなのに、知識を与えると同時にことばを修得させることも可能であり、効果的である。

こうしたことから、A・B・C・Dの各段階を漢字国民とそうでないものとに分けた上に、A・Bはさらに、理工系・社会系・文学系と分けるようになった。そこで、ILF NEWS 21号で報告された通りのクラス編成が行われたのである。その結果、大きいクラスでも18名、平均12～15名という、一見理想的な人数のクラスばかりとなった。日本人学生のように、大体つづのそろった学生なら、15人で理想的ということもいえるだろうが、これまで詳しく

のべたような学生の場合は、これでもまだクラスが大きいといわなければならない。同質のものの50人と比べると、異質のものの15人の方が始末がわるい。われわれは人数のことよりも、同質またはそれに近いもののみのクラスをつくりたい。その結果、人数が少なくなればそれこそ理想的なかたちというべきだろう。

以上のべたようなクラス編成を得た上で、最も大きな問題としてわれわれの頭の上におおいかぶさっているのは、大学の各専攻課程を履修するに最少限必要な日本語の学力とは？そして、その教材・教授方法は？ということである。これは同時に各大学の日本語教育機関に共通の最大の問題点である。

(語研日本語科専任講師)

Kleines Sprachproblem

„der“ oder „das“ ?

„Dem Verdienste seine Krone!“ (F. Schiller)
において、dem Verdienste の一格は、der Verdienstか？
das Verdienstか？ der Verdienst=Lohn, Vergütung
で das Verdienst=anerkanntenswerte Leistung
であるが、ここでは „Krone“ は „Münzname“ ではなく
て „Ehre“ の意味で用いられているので、das Verdienst が正しい。

次の文では、das と der が正しく用いられている。

Es ist das Verdienst der Gewerkschaften,
dass der Verdienst der jüngeren Angestellten
auskömmlich ist. (若い社員が充分俸給をもらえる
は、労働組合のおかげだ)

—— „Unsere Zeitung“ より ——